

平松礼二講演会 モネへのオマージュ (デモクラット 2018.6.16)

日本人画家、平松礼二画伯がジヴェルニー印象派美術館での『平松礼二展』に合わせて先金曜日、“モネへのオマージュ”と題した講演を行いました。

その場には、木寺日本大使、フランス政府環境省、閣外大臣のセバスチャン・ルコルニュ氏も同席、そこには正装した多くの日本からの参加者の姿が見られました。

2013年に催された平松礼二展の回顧展として、今年再び平松礼二・コレクションの作品が会場の一室に展示されています。

印象派美術館のプレジデントでもある、ルコルニュ閣外大臣は『平松礼二氏のご好意、その優れた才能、お人柄、厚情に深く感謝いたします。』とまず挨拶。

第2次大戦後、多くの日本画家が西洋美術へ傾向する中、平松礼二画伯は、若い時から日本美術へ心を傾け、創作を続けてきました。

「自分は、日本文化の後継者となりたかった。」と画伯は語ります。

そして、「自分はモネの絵を見て強い衝撃を受けた。」と。

1994年、平松画伯はパリを訪れ、モネの作品に出会います。

「展覧会のオープニングに招かれ、そこでワインを大いに飲んで

翌日は二日酔い。その足でオランジェリー美術館へ。

そこで、モネの作品と出会い、大きな衝撃を受け、

動けなくなった。」とのエピソードです。

まさに、浮世絵などで代表される日本画の巨匠が印象派の巨匠の作品に出会い、日本文化との絆、繋がりを見出したのです。

「西洋の絵画は、遠近法に根ざしている。ところがモネの絵は遠近法によって描かれず、そこに東洋の技法が見られる。」と画伯は語ります。

強く心を打たれ、「光（答え）を求めて」「モネの池の周りをまわり、多くのデッサンを重ねた。なぜ、日本人の自分が日本人の心でもって、こうもモネの作品に感動するのだろうか、それを知りたかった。」と、画伯は続けます。

この出会いから20年が経ち、平松画伯自身が、“浮世絵を愛しその重要な蒐集家であるモネへのオマージュ”展を催すことになったのです。

「平松氏はモネに影を落とす存在になってきた。」とセバスチャン・ルコルニュ氏はユーモアを込めて紹介していました。